

山形県立山形西高等学校創立114周年記念式典 校長式辞

山形県立山形西高等学校の創立114周年記念式典に当たり、皆さんと一緒に、しばし本校の歴史をひもとき、決意を新たにしたいと思います。

本校の前身は山形市高等女学校で明治31年（1898年）に設立されました。場所は私たちが今いる山形県県民会館の道路を隔てたおかい側、山形地方裁判所がある所です。

今から114年前、このすぐ近くで、私たちの学校は誕生したのです。

それから4年後、明治35年4月1日、山形県女子師範学校（現在の山形大学地域教育文化学部のいわば女子部）と併設する形で山形県高等女学校が開校します。同年7月12日には香住町に完成した新しい校舎の落成を祝い、高等女学校の開校式が行われました。現在の場所と言えば、山形市民会館、保健所があるあたりです。

その頃のエピソードを紹介すると、明治36年11月、現在の校内総体に当たるものが初めて開かれています。種目はテニスでした。校内テニス大会です。同じ頃から障害物競走や綱引きを含む、運動会も開かれていたようです。

また、明治41年の学校行事を見ると、修学旅行はもちろん、今の嚶鳴祭に当たる学芸会や音楽会も開かれています。特に音楽会は、大正2年から一般市民にも公開され、多くの市民が本校生徒・教職員の演奏を楽しむとともに、時には一般市民自らも参加し、市民の音楽会として親しまれたということです。

大正14年、山形高等女学校卒業生の進路状況は、本科卒業生100名のうち、上級学校進学者は38名を数えています。上級学校進学率38%です。全国の高等女学校からの上級学校進学率の平均が27%の時代ですから、かなり高い割合とすることができます。

そのような状況を踏まえ、山形高等女学校では「進学準備教育」が始まります。進学希望者には英語と国語を中心に毎日5時まで、水曜日と土曜日には授業開始前に1時間、受験準備教育が行われている、と当時の新聞が伝えています。私たちの学校では、実に90年前から「ゼロ校時」が行われていたことになります。

明治・大正という時代を通して、次第に今につながる本校の姿・形が定まって行きます。

そして昭和7年、名称が山形県立山形高等女学校から山形県立山形第一高等女

学校へと改称されます。

私は様々な場で全国の校長先生たちと一緒にいる機会がありますが、「山形西高は、元の山形第一高女です」と言えば、西高がどんな学校か、すぐに理解していただけます。「第一高女」という響きは、それほど誉れ高いものなのです。

しかし、太平洋戦争が末期に向かおうとする頃、山形第一高女を悲劇が襲います。

昭和19年2月23日、雪の降りしきる夜、香住町にあった校舎は火に包まれてしまうのです。体育館を半分残しただけで、ほぼ全焼でした。目前に迫った卒業式をする場所がありません。どうしたか。

前の年まで41年間併設されていた山形師範学校の寄宿舍が焼けなくて残っていました。その食堂を仮の場として、昭和19年3月の卒業式は挙行されたのです。卒業生たちの無念は想像に余りあります。

卒業生代表松浦照子の答辞を一部引用します。

「この長い伝統と光栄に輝く、何物にも代へ難い思出の校舎も、一瞬にして灰燼^{かいじん}に帰しました。あの母校の災禍、余りにも悲惨な運命の戯れ、親鳥の愛の翼を失った雛鳥の様に、暫しは呆然と涙に咽^{むせ}んだ私達ではございましたが、母校復興の誓も堅く全校生徒一丸となって、一草もなき廢墟の中から、力強く、復興の第一歩を踏み出したのでございます。懐かしの学び舎を失ったこの悲哀の情、しかし私達は、徒^{いたづら}に空しい形骸に執着し、何時迄も弱い感傷にのみ捉^{とら}はれて居りませうか。仮令^{たとひ} 栄^{はえ}ある校舎は失っても第一高女の長い歴史と栄誉とは、私達の頭上に燦として輝き、心の中に脈々として生きて居るのでございます。」

自らを奮い立たせ、恩師と後輩たちに後を託す、魂切るような心の叫びが伝わってきます。

この山形県立山形第一高等女学校第41期総代松浦照子は、卒業後東京女子医学専門学校に進みます。当時、高等女学校からまっすぐ国立大学に進む道はありませんでした。したがって、女性でもすぐに専門教育を学ぶことのできる東京女子医専、現在の東京女子医科大学は、非常な難関校でした。しかし照子は10番以内で合格し、一年が終わる頃には首席となり、山形第一高女に在籍した時と同様、卒業まで首席を続けることになります。

結婚して石坂という姓を得た照子は、国立予防研究所に勤めた後、夫石坂公成とアメリカに渡り、子育てを続けながら、カリフォルニア工科大学やデンバーの

小児喘息研究所で研究を続けます。そして昭和41年（1966年）、夫とともに、アレルギーを起こす原因となる「免疫グロブリンE」を発見するのです。アトピーや花粉症などのアレルギー抗体です。

アメリカで顕著な医学的業績を挙げた人に贈られるパサノ賞という賞があります。パサノ財団、Passano Foundation のホームページに入っていくと、受賞者リストの1972年のところに、キミシゲ・イシザカとテルコ・イシザカの名前が並んでいます。そのページを見た時、私は言いしれぬ感銘を受けました。まわりにはきら星のごとく著名な学者たちの名前が並んでいます。ノーベル賞受賞者を示すマークが付いている人たちもたくさんいます。年によっては、一人だけでなく、石坂夫妻のように共同研究なのか、複数の名前が書かれてる年もあります。しかしその複数並んでいる人たちの中にラストネーム、名字が同じものは一組としてありません。

ひたすら外国人の名前が並ぶ受賞者リストの中 1972の下にあるKimishige Ishizaka、Teruko Ishizaka、このわずか2行の文字が、アメリカという広大な世界で、身を寄せ合いながら、互いに励まし合って、少しずつ業績を積み上げてきた二人の姿を象徴しているように思え、しばらく目を離すことができませんでした。

夫婦は2回目の渡米時にデンバーからボルチモアにあるジョンズホプキンス大学に移ります。照子の実績が認められ、最初からアソシエイト・プロフェッサー、准教授として迎えられるという破格の待遇を受けます。そして1979年には医学部教授に昇任しました。

ジョンズホプキンス大学はハーヴァード大学や ペンシルヴァニア大学などとともにアメリカ東部を代表する名門大学です。その名門大学に女性の教授は、新しく教授になった照子を含めてもたった二人しかいませんでした。恐らくアメリカの大学で日本人の女性が正式な教授になったのは照子が初めてだったと言われています。

本校のアカシア会館には、先ほどのパサノ賞の賞状の他にも、照子が単独で受賞したベーリング北里賞などの賞状が飾ってあります。彼女が読み上げた答辞も現物を見ることができます。

山形を愛し、母校を愛し、しばしば西高を訪れた石坂照子の業績が顕彰してありますので、改めて足を運んで見て下さい。

日本では、2月20日は「アレルギーの日」です。この日は石坂夫妻が「免疫グロブリンE」を発見し、アメリカアレルギー学会で発表した、その日にちなんでつけられたものです。

23年前の2月23日、焼失した校舎の跡に茫然とたたずんでいた少女は、幾つもの困難を乗り越え、夫とともに世界的な発見をして人類の未来に貢献したのです。

では、9月には86歳になる石坂照子は、今どうしているでしょう。

実はジョンズホプキンス大学在職中にパーキンソン病という不治の病に冒され、日本に戻り、今は山形大学附属病院に入院しています。石坂家は蔵王成沢に居をかまえているのですが、その土地は昭和60年、二人がまだアメリカにいるうちに購入したものです。夫石坂公成は「引退したら山形に帰りたい」という妻の願いをかなえるため、妻のふるさとに土地を求め、自らの引退の後、山形に同道し、今も妻の看病を続けているのです。

48歳という若さで文化勲章を受章し、ノーベル賞候補の一人と言われる人間が、そのすべてを投げ打って、毎日妻の病室に足を運び、妻に語りかける日々を送っています。この夫婦のありようにも、胸を打たれずにはられません。

山形第一高女にはまた別の悲劇が襲うことになりますが、それはまた別の機会、あるいは別の人に委ねることにしましょう。

多くの先人たちの思いを受け継ぎ、今、山形西高に学ぶことのできる誇りと幸せ、そして感謝を胸に、日々精進を続けることを改めてここに誓いましょう。

他人の痛みの分かる思いやりを持った人間になって下さい。

自分の夢を追うことが何らかの形で社会貢献につながるような、高い志を持った人間になって下さい。

山形にいても山形を離れても、いつも故郷を大切に思う人間になって下さい。

師弟朋友相集い、互いに切磋琢磨する^{ふるさと}という、私たちの嚶鳴精神を胸に抱き、未来に向かって一緒に進んでいきましょう。

平成24年6月20日

山形県立山形西高等学校長 阿部和久